MONTHLY ESSAY INUMO-ARUKEBA by INUHIKO YOMOTA

犬も歩けば

四方田犬彦
連載第54回

VOLUME 54

ポーランドにて

ILLUSTRATION BY;やまだ紫

三月二六日

地下鉄をブルスで降り、バンク街一番地にあるルグランという酒屋に行く。ワインを買うならぜひここに、と知人に勧められたからだ。

駄菓子の入ったガラス瓶の並ぶ店先を抜け、奥に入ると、あるわあるわ、ずらりとワインが並んでいる。マダムは四十歳代半ばの痩せた女性で、九人姉弟の末子だが三代続いた店を継いだ。試飲をさせてもらいながらそんな話を聞いていると、十二、三歳の女の子が水のなかの鮎のようにすらりとわれわれの間をすり抜けてゆく。末の娘です、とマダムが紹介する。じゃあ、この子が後を継ぐわけですね、という話になる。

生まれ歳を越えてワインを呑むことはできない、とはよくいわれるところだ。十七、八本いろいろ選んでもらっているうちに、少し予算に余裕ができたので、ひょっとして一九五三年のものはあるでしょうかと申し出た。とたんに古くぶ厚いカタログが運びこまれ、あれがいい、これがいいという話になる。結局、同年のシャトー・ジレット、それも貴腐ワインを千フランで求める。まだ二〇年はゆうにもちますよ、といわれる。二〇一三年、ぼくが六〇歳で運よく生きていたら、同い齢の連中を呼び求めて振舞うことにしよう。

アパートの近くの市で羊の脳味噌を求める。若い女性がわざわざ皮を剝いだ血塗れの羊の頭骸を手で外し、内側からとろりとしたものを取り出してくれた。津島祐子が、いつも肉屋で見かけるけれどもいったいどのように食べるのかわからないと先日いっていたから、彼女を招いて料理してみせることにしたのだ。ポーチして、バターとレモンをかけ、カッペリをちらすと、鱈の白子のような味がして悪くない。これはぼくの昔からのレパートリーだった。津島さんは昔、娘といっしょになぜかお財布を忘れてレストランに行って大失敗をした話を披露し、子よりも親が大事よね、とつけ加えた。知ってか知らずか、それが太宰治の〝桜桃〟の科白だったので可愛かった。

三月二八日

ドゴール空港から二時間でワルシャワに到着する。はじめて見るワルシャワの印象は、道路の広さと地下道の薄暗さ、店の小さな窓口に並ぶ人々だ。中央駅の前に高く聳え建つスターリン建築が、街の印象を決定的に悪くしている。戦後社会主義の途を歩みだした「同胞」のポーランドに対してソ連が「贈った」という、文化宮殿という名の建物だが、もはや誰も利用しようとせず、一階を除いてがらんとしている。社会主義とソ連の支配した時代がそのまま廃墟となって残っているといった感じがする。

夜になって食事をしに旧市街へ向かう。人気のない街角はまだ寒く、時を告げる教会の鐘が冷たく鳴り響く。しばらく歩いているうちに、この地域が全体として巨大な映画のセットであるかのような印象をもちはじめる。どの路地も、どの建物も、いかにも古そうに見えながらも、表層の存在に思えてくるのだ。これは無理のないことかもしれない。第二次大戦によって徹底的に破壊されたワルシャワは、残っている写真や記憶にもとづき、市民の手によって「再現」された街であったためである。再現はレンガの数や壁の罅のレヴェルに至るまで行われたという。喪失したもの、破壊されたものをもう一度回復したいという人々の執念には相当なものがある。東京もひどい戦災にあったが、誰もこんなことは考えてもいなかったはずである。とはいうものの、なぜか街角が真正のものでないという雰囲気がつきまとう。複製であることの悲しみ。

三月三〇日

クラクフからバスを二台乗り継いで、オシュフェンチムに行く。ドイツ名をアウシュヴィッツといって、ナチスがユダヤ人撲滅のために強制収容所とガス室を設けたところだ。現在は博物館になっていて、誰もが無料で見学することができる。ほとんど無人のバスから降りたったのは

ぼくと、プラハに仕事で長期滞在しているという、冗談好きの、三十歳代のアメリカ人だった（彼はまずオレゴン出身だといって、いかにも手馴れた手つきで故郷の町の絵葉書を何故か見せてくれた）。
　博物館に到着すると、白い丸帽を被り、星印を胸につけた高校生たちが何十人となくバスから降りてきた。テルアビブから来た修学旅行生だという。アウシュヴィッツの内側は案外小さく、かつては高圧電流が流れていた鉄条網に囲まれて、レンガ造りの建物が二八棟並んでいるばかりである。ユダヤ人たちの眼鏡、鞄、義足、コルセットなどが、いく部屋にもわたって陳列されている。二十米ほど毛髪ばかりを集めた部屋もあった。髪の毛はもう半世紀以上経っているためか、いちように灰色になっていた。洗面所の壁には小さな可愛らしい仔猫がじゃれあっている絵が描かれていた。その隣には、これも可愛らしい少年と少女が睦まじく並んでいる絵。死を前に連日の激しい労働で疲れきっていたユダヤ人たちは、この絵をどのような気持で眺めていたことだろう。ぼくは今後、二匹の仔猫の絵を見るたびに今日のことを思い出すに違いあるまい。
　ひと通り館内を見学し外へ出ると、信じられないことではあるが、見学者用の食堂があった。先に会ったイスラエルからの高校生たちがいちように同じ皿の食事をしていた。ソーセージ、ポテト、スープ、パン。当然のことながら空腹だったぼくとアメリカ人も、同じものを注文した。
　だが、アウシュヴィッツはまだ序の口だった。タクシーの運転手から、お客さんたち、せっかくここまで来たのならひとつビルケナウの方まで出掛けてみてはどうだい、と誘われたのだ。あそこはここほど有名じゃないけれど、ここの何十倍の規模だしね。
　というわけで四ドル払って、ぼくたちは数千キロ離れたビルケナウ収容所へ車で向かった。アウシュヴィッツだけではとうていユダヤ人を捌ききれないと考えたナチスが、第二次大戦中に急拵えで建設した、恐ろしく広い収容所である。五三万坪というから、その広大さは推して知るべし。
　さすがにここに来たときには驚いた。下が土間の、家畜小屋のような収容所が（大方はすでに破壊されたのだが）残っている。だが、アウシュヴィッツと違って、博物館というよりむしろ廃墟というべきだろう。ナチスは戦局が好転せず、もはやレンガ造りの立派な建物を建てられなくなった。かわりに湿地帯に即席の小屋を何百棟も建てたのだ。
　陽気で軽口ばかり叩いていたアメリカ人はもう何もいわなくなった。ビルケナウでは、歩いていると当然に地面の色が灰がかったピンク色に変わったり、池の水が灰緑色に重く淀んでいたりする。ユダヤ人の骨を燃やした灰のせいである。森の奥地に行くと、いまだに白骨が大量に地下から発見されたりするらしく、草原のところどころにイスラエルの国旗が建てられている。だが残余はというと、これがすべて廃墟。浴場など、おそらく戦後そのまま放置されたきりではないか、というほどの荒廃ぶりだ。ぼくと合棒はこの無人の草原と廃屋の群のなかを、およそ二時間かけて歩いた。
　われわれはすでにフランクルの『夜と霧』をはじめ、多くの書物でくり返し強制収容所の悲惨を知らされ、既視感の確認といった側面もある。だが、何の知識もなく、はじめてここに足を踏み入れた連合国側の兵士たちは、大勢の痩せ衰えたユダヤ人や死体の山を見て、いったいどれほどの衝撃を受けたのだろうか。

四月一日
　クラクフで知りあいになった彫刻家バーバラ・ザムブルジスカ＝シュリヴァの娘アンナと、スターリー劇場でヴィスピャンスキの『結婚』を見る。ポーランドの国民的劇作家としてお札にも描かれている人物だが、ロマン主義的ナショナリズムの昂揚とフォークロリックな想像力の結合という点で、同時代人のハウプトマンとずいぶん共通するところがあるという感想をもった。二〇世紀の初頭、露独墺に三分割されて消滅したポーランドをもう一度興隆させようとするクラクフの青年知識人と、純朴な農民との意識のズレ。深夜に次々と登場する往古の皇帝の幻影や妖怪たち。舞台のポーランド語は少しもわからないが、隣のアンナが耳もとでいつも説明してくれたので助かった。
　芝居がハネたのち、カントルと三〇年間行動をともにしてきた写真家ヤチェク・ストコーサのアトリエに招かれる。自分の親友のマネキン人形に裸の女を絡ませて写真を撮るといった、奇妙なアーチストである。婦人が癌で彼は深い悲嘆のさなかにあるのだと、あらかじめアンナが教えてくれた。遅い夕食をとっていると、隣の部屋で咳の声が聞こえ、やがて静かになった。カントルの死後、彼の劇団にいた人々はみんなバラバラさ、とストコーサは寂し気に笑う。